

女性シンガーとポストフェミニズム  
—音楽雑誌『GiRLPOP』の事例を手がかりに—

星川彩（大阪大学大学院 博士後期課程）

本発表の目的は、1980年代後半から1990年代中盤にかけて展開した「ガールポップ」と称されるムーブメントを日本のポピュラー音楽史の文脈に位置づけるとともに、雑誌『GiRLPOP』誌上で顕在化したポストフェミニズム的な女性イメージを析出することである。ガールポップは1980年代後半以降に台頭した女性シンガーの動向を包括的に示す概念であり、とりわけ1992年創刊の音楽雑誌『GiRLPOP』を中心とするメディアミックス的戦略によって形成された。ゆえにガールポップは、バンドブーム以後からJ-POP成立前夜にかけての過渡期に生起した現象であり、多様な女性シンガーを市場化・類型化する戦略的ラベリングとしての機能を担ったと言える。しかしながら今日に至るまで、ガールポップは日本のポピュラー音楽における一つの潮流として十分に検討されてきたとは言い難い。ガールポップは女性の社会進出や自由恋愛の肯定といった、第二波フェミニズム的な思想の成果を女性の歌手が明確に体現した現象でもあり、国内のポピュラー音楽をめぐるジェンダー表象の変遷を俯瞰するうえでも興味深い事例である。ゆえに本発表では「バンドブームからJ-POPへ」という歴史的展開のなかにガールポップをいかに位置付けられるかを検討し、またその過程において、フェミニズムの思想がいかに顕在化したのかを考察したい。

本発表が考察するのは、雑誌『GiRLPOP』のインタビュー記事において顕著であった、女性シンガーたちの語りの形式である。同誌では楽曲の制作秘話として、女性シンガーに恋愛経験や性的魅力を語らせるというインタビューの形式が繰り返し採用されたが、このような語りは彼女たちに「等身大で恋愛を享受する若い女性」という規範的イメージを付与しながらも、同時に彼女ら自身が抱くジェンダー規範への違和感や、社会進出・自立への志向を可視化する効果をもつこととなった。つまり『GiRLPOP』の誌面上における女性シンガーは、従来の「女性らしさ」を体現する存在であると同時に、自由恋愛や自律性を主張しうる「先進的な女性」としても位置づけられていったのである。

本発表では、このような「先進的な女性」のイメージを第二波フェミニズムの成果の一部として称揚するにとどまらず、彼女らの存在を日本における「ポストフェミニズム」の萌芽として捉えたい。ポストフェミニズムとは、フェミニズムが掲げてきた諸目的—とりわけ女性の社会的権利の獲得—が一定程度達成されたという前提のもと、フェミニズムを不要、あるいは時代遅れのものとみなす状況を指す概念であり、今日ではこの状況を批判的に把握するための分析的枠組みとして用いられている。ガールポップが体現した「楽曲制作に励みながら自由恋愛を謳歌する、等身大でありながらも先進的な思想を有する女性シンガー」像は、女性の歌手がプロフェッショナルかつクリエイティブな主体的存在として打ち出させる過程において、日本のポストフェミニズム的状况を可視化する重要な文

化的装置として位置づけられる。本発表は以上の観点から、ガールポップを日本のポピュラー音楽史における転換期の文化的事例として再検討し、女性表象の変容とポストフェミニズム的状況の初期的兆候を明らかにしたい。